

第2回(平成20年度)栃木県元気な農業コンクールいきいき農村部門受賞者紹介

☆ 女性・高齢者活動の部

(1) 審査経過

女性・高齢者活動の部は、各地から女性部門で7事例、高齢者部門で1事例の、計8事例の応募がありました。組織タイプ別には、個人タイプが2事例、集団タイプが6事例となっており、女性部門、組織タイプの応募が多かったのが特徴です。いずれの事例も、男女共同参画、高齢者の社会参画の域を超え、起業の主体となり、経営の中心として活躍しており、まさに「いきいき」と農村の活性化を担っている事例ばかりでした。

審査委員会では、①自主的努力と創意工夫、②推進体制の整備と運営、③男女共同参画・高齢者社会参画の状況、④地域の農業振興や活性化への寄与の4つの視点から審査を行いました。第1次審査では、応募書類を中心に5人の審査委員が点数をつけ、委員間の討議を勘案して判定を行い、上位3事例に関しては現地調査によるヒアリングを行い、調査内容も勘案して最終判定を行いました。

(2) 審査講評(受賞組織の概要)

○ とちぎ元気大賞 (関東農政局長賞・栃木県知事賞)

川上 秀夫・きみ子 氏 (茂木町：個人)

川上氏は、平成8年の道の駅もてぎ建設をきっかけに、中山間地における施設園芸の先駆けとして60才にしてビニールハウス4棟、加工施設の建設を行い、野菜・加工品の直販にチャレンジ、夫婦の二人三脚で茂木町の農産物直売部会を引っ張ってきたパイオニア的存在です。

周年出荷を目指したハウスの高度利用、畑地と山間地を活かした野菜・山菜の拡大、付加価値化を目指した農産加工品・漬物・惣菜の拡大と、取扱品目は58品目に及び、現在も商品開発は拡大中です。直売所での計画的周年出荷を前提に、加齢に伴う軽量野菜への転換を含みながら、農地の高度利用と加工による付加価値生産を組み合わせ、年間販売額1,000万を超える実績を生み出してきました。

その実績は高齢者農業のモデル経営という域を超え、大規模経営とは異なるもう一つの担い手像のモデルとして高く評価されました。

また、農産物直売部会のリーダーとしては、安全・安心の野菜づくりに積極的に取り組み、茂木町農産物リサイクルセンター美土里館との連携による土づくり運動と生産履歴記帳運動、茂木ブランドの認証制度を推進、消費者の支持の下に直売所販売額2億円突破に貢献しました。こうした地域農業のトップ・リーダーとしての活動も高く評価されました。

販売起点の農業経営、高齢化社会における「いきいき」経営のモデルとして、大賞にふさわしい事例でありました。



○ とちぎ元気賞（栃木県知事賞）

西方町農産物加工組合「おとめ会」（西方町・組織）

昭和 58 年の「農村婦人の家」建設をきっかけに始まったいちごジャム・ジュース加工への取組みを母体とし、平成 16 年のふれあいの郷づくり事業による農産加工施設拡充を契機に、女性 21 人で結成された起業型農産加工グループです。先のジャム・ジュース加工品に加えて、仕出し弁当・漬物・味噌・菓子部門と 6 部門へ事業範囲を拡大、売上額も 3 千万に達してきています。

特に仕出し弁当は、地元食材を利用した季節性のある新メニューを開発、毎月メニュー化して固定客確保を図るとともに、デイ・サービス業務を一部受託し、独居老人等への食事配達も行っています。

評判の高いいちご加工品と漬物は、直売とともに地場スーパーや小売店から引き合いが殺到、契約出荷へと販路が拡大中です。建設予定の道の駅の中核としても期待されており、販路の拡大に対応して、今後の飛躍が期待できると高い評価を受けました。

高齢化に伴う会員の減少が見られ後継者育成が課題となっていますが、調理師やヘルパーの資格取得にも組織的に取り組み、事業拡大に連動した体制整備も整いつつあります。次の「美田の郷」と甲乙付け難く、元気賞同時授賞となりました。



○ とちぎ元気賞（栃木県知事賞）

惣菜研究会 「^{みた}美田の郷」（小山市・組織）

平成 18 年の道の駅「思川」建設をきっかけに、惣菜・弁当部門を中心に、女性 23 名（他に出资者 7 名有り）で結成された起業型農産加工グループです。

地元食材を中心に、ご飯類・惣菜類・その他で、計 70 品目余りの商品開発を行い、販売アイテム数は 250 にも及び、売上高は 4 千万に達してきています。

食材の野菜は会員の農業部門の重要品目に育ちつつあるとともに、道の駅に併設された直売農産物と連携、食材供給ネットワークが形成されつつあります。調理体制は、6 チームのシフト体制を組み、メニューやレシピのマニュアル化が進むとともに、小山市の「菜の花プロジェクト」の一環として、菜種油を使った商品開発にも組織的に取り組んでいます。衛生管理に配慮しつつ、「見える調理場」として道の駅の顔ともなっており、今一番勢いのある組織体として高く評価されました。

社会活動へも女性代表として会員が積極的に参加、地域の教育や福祉へと活動範囲を広げてきており、そうした男女共同参画の母体的位置を占めている点も高く評価されました。先の歴史のある「おとめ会」と甲乙付け難く、元気賞の同時授賞となりました。



○ 特別賞（栃木県農業協同組合中央会長賞）

小俣かたくり加工組合（足利市・組織）

昭和 56 年の生活研究グループ協議会を母体とし、昭和 63 年に直売所開始、平成 9 年の加工所建設を契機に女性 11 人で結成された起業型農産加工グループです。山間地という地理的条件にもかかわらず、味噌、漬物、惣菜、菓子など、地元食材を使った事業部門を拡大してきました。

特に平成 10 年以降は健康食品として地域特産物のアマランサスに着目、まんじゅう、パン、菓子・ようかん・うどんなどに使用、次々とヒット商品を生み出していた点が「こだわり商品開発」のあり方として高く評価されました。事業規模の点で元気賞に一步譲る形となりましたが、こうした組合のこだわり商品開発姿勢は、地元商工会との連携へと波及、異業種を巻き込んだ地域興し運動へと広がりを見せ、地域活性化の優良事例として、特別賞中央会長賞にふさわしいと高く評価されました。



○ 特別賞（下野新聞社長賞）

稲葉 信子 氏（上三川町・個人）

稲葉氏は、無農薬野菜の生産と直売を行う都市農業型の個別経営です。

平成 8 年、直売所の設営に当たっては企業診断士に相談、市場調査を行った上で開設、顧客とのふれあいにこだわり、対面販売・宅配サービス、雨の日サービスなどリピーターの確保を計画的に図っていきました。

平成 14 年には、こうした取り組みが評価され女性農業士に認定、平成 18 年には顧客へのサービス拡大のため、野菜のソムリエ資格も取得しています。無農薬栽培や加工品へとその事業範囲を高度化し、平成 17 年には東京を含む 5 つのレストランと契約栽培に取り組んでいます。野菜の周年供給に向けて 50 品目以上の無農薬野菜の計画的生産に取り組み、その技術水準も高いことが評価されました。今回の審査では高齢者パワーに一步譲りましたが、顧客重視の都市型農業モデルとして、対面販売、安全安心、交流、リピーター重視のこだわり販売戦略として、さらに、女性経営者の域を超えた事例として、高く評価されました。



○ 特別賞（下野新聞社長賞）

「ひまわり会」（宇都宮市・組織）

都市化地帯において、平成 3 年に女性 9 名で設立した生活改善クラブを母体とし、平成 5 年にはデパ地下産直店に参画、平成 10 年からは直売所と農産加工に取り組んできました。平成 13 年からは地元小・中学校への農産物供給を開始、栃木県における学校給食への食材提供のパイオニア的グループです。生徒の体験学習や交流会、地元老人福祉センターへの食材提供など、その活動・交流範囲が広がるとともに、こうした活動が波及して地域の地産地消ネットワークが拡大する契機となっていきました。現在の栽培品目は安全安心に配慮した野菜生産は 20 品目以上に及び、女性参画という域を超えて、地産地消ネットワークの核的存在として活躍してきています。今回の審査では、会員の広がりや現在の勢いで他の事例に一步譲りましたが、地域活性化のパイオニア的存在のモデル事例として高く評価されました。

